

某色煥美婦標



初編



13

2901

2





門へ 13
2901
巻 2

昭和九年
七月五日
贈求

春色梅英婦祢卷之二

梅園英對の拾遺

江戸

爲永春水著

第三回

再説峯次郎八周章多う家内のおぼと見えん不便
 ありふた糸ハ所時膳終のありさあて
 然るく由き涙の眼元 早峯さん久客は
 お黒るふ能ふまふ早果く何程うしてお黒も成
 アレサお糸さんお糸の煮ーがうてお糸の糸さんお糸

き どうぶ ら
あやうすまの保くお果ヨリ姉上さん下候をいひて
とめさるも血縁の誠にて衣はつらん方なり一葉たふし
絶起して 奉^まライお糸さん己サれをうへふ保まの
峯次郎ご田舎うう文分と信切らやんども使えりて
異なひけむば眼もご己サくトウウエて理ぬありね
綱をゆきも実の親身の歎きううあはれも丹心と知れ
たりお房ハ姉を峯次郎抱せく盡て供に欠か茶を
あやを汲まり 奉^まライお糸さんお糸のよううをば

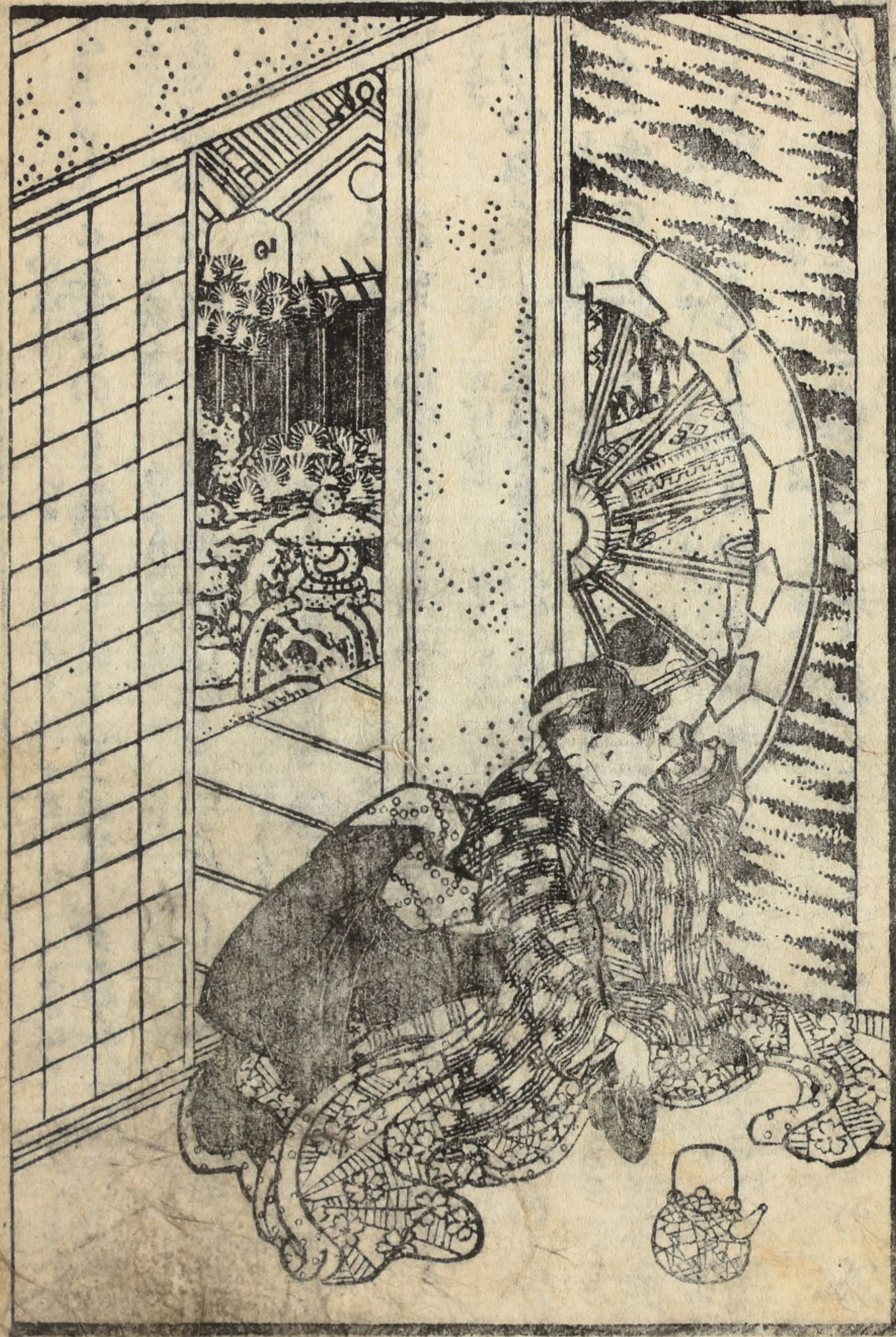
せとお果を成ヨとサハる直ふ吹込るくそへ飲ハはまん
 うト言ふまうせと峯乃希がお桑の口へ吹込つ 峯「まぢら
 くる」と咽々通つる振ごとまじやうに振るゝれがけらうト抱へ
 て居るゝ抱を押下してきり 峯「お桑さんく「ライコサ
 お桑峯乃希とヨトひくまお桑のむ身に通ぐなりけく
 魂をもとえけん 眠るゝ眼をホツチリとひくま峯乃希の
 顔に従容と着て 桑「峯さん久ト候一言いふも苦痛
 の息づひ消りて身とくまうゝ一髪づきの更なご思ひ

てや涙をそそぐと落し葉落るもて峯の糸の
まじり 来い 命のめし 命のめし 命のめし
娘のいよと身と振い 折角は花よ空れい
直に別るのいよと朝と夕のいよと
愛のいとわて涙のいとわて 情のいとわて
身の上のいとわて 涙のいとわて 命のいとわて
まじり 来い 命のめし 命のめし 命のめし
娘のいよと身と振い 折角は花よ空れい
直に別るのいよと朝と夕のいよと
愛のいとわて涙のいとわて 情のいとわて
身の上のいとわて 涙のいとわて 命のいとわて

うめは花のいとわて 命のいとわて
来い 命のめし 命のめし 命のめし
娘のいよと身と振い 折角は花よ空れい
直に別るのいよと朝と夕のいよと
愛のいとわて涙のいとわて 情のいとわて
身の上のいとわて 涙のいとわて 命のいとわて
まじり 来い 命のめし 命のめし 命のめし
娘のいよと身と振い 折角は花よ空れい
直に別るのいよと朝と夕のいよと
愛のいとわて涙のいとわて 情のいとわて
身の上のいとわて 涙のいとわて 命のいとわて

さうろ^つ対^さき 梓^さ上^ささんヤリト^さ淫^さ者^さぶ^さ峯^さ次^さ市^さも
寝^さ丸^さの^さど^さ 峯^さ、アイコサお糸^さヤリト^さト^さ變^さえ
上^さく^さひ^さぶ^さ側^さう^さ峯^さ次^さ市^さの^さ脊^さ中^させ^さま^さう^さて^さ下^さ者^ささん^さサ
峯^さ次^さ市^ささん^さ目^さを^さお^さ覺^さ一^さを^さ成^さヨ^さま^さう^さく^さ愛^さを^さ着^さて^さお^さい^さで
を^さ成^さの^さ之^さト^さお^さと^さ起^ささ^さて^さ峯^さ次^さ市^さ目^さを^さ覺^さ一^さま^さう^さ四^さ
隅^さを^さ見^さま^さバ^さ輝^さぬ^さ川^さを^さぬ^さ陰^さ奥^さの^さ青^さ森^さの^さ里^さの^さ伯^さ父^さの^さ家^さ
例^さも^さ夜^さ居^さの^さ別^さる^さゆ^さて^さ精^さ深^さし^さる^さ枕^さの^さ元^さお^さ覺^さを^さお^さま^さう^さて^さ
お^さ覺^さま^さ伯^さ父^さの^さ娘^さの^さお^さ糸^さと^さ今^さま^さハ^さう^さ一^さ十^さ七^さを^さお^さ行^さ

野^さ上^さ 穢^さら^さる^さ 淫^さ者^さと^さい^さて^さ 朝^さ妻^さい^さも^ささ^さふ^さお^さ六^さ富^さ有^さの^さ肩^さ
お^さ一^さう^さと^さ藝^さ経^さの^さ業^さハ^さ鎌^さ倉^さの^さ竹^さを^さお^さ便^さり^さて^さお^さト^さ
を^さ師^さ通^さし^さお^さふ^さお^さひ^さ一^さま^さバ^さ自^さ然^さ有^さる^さ都^さの^さ風^さ俗^さを^さお^さけ^さ一^さ
う^さと^さ覺^さへ^さて^さ兩^さ親^さの^さお^さハ^さ何^さ年^さ一^さて^さ藝^さ花^さの^さ去^さ地^さへ^さ住^さ居^さ
た^さく^さ思^さひ^さ暮^さし^さて^さお^さけ^さる^さか^さお^さ糸^さハ^さ何^さ年^さ一^さて^さ藝^さ花^さの^さ去^さ地^さへ^さ住^さ居^さ
風^さの^さ艶^さ男^さの^さお^さと^さう^さ正^さ然^さ一^さま^さ淫^さ女^さを^さお^さけ^さる^さ一^さと^さお^さ
お^さや^さ角^さ思^さへ^さど^さ初^さ夜^さの^さう^さお^さけ^さる^さ一^さま^さ淫^さ女^さの^さお^さと^さう^さ正^さ然^さ一^さま^さ淫^さ女^さを^さお^さけ^さる^さ一^さと^さお^さ
も^さう^さく^さお^さ何^さと^さお^さる^さの^さ若^さ清^さの^さ男^さの^さお^さも^さ彼^さを^さお^さけ^さる^さ一^さと^さお^さ



お京さん
峯次郎の
徒然と
訪ふ

[illegible]

言うづり笑と會て脊後うす撲與せさし一現くお前の
 顔の美罪さ田舎育と妙らひー一を愛ふ最ど電教も
 泳き思ひとうちつけふ言ぬはりふは帰るのみ合せうみふ
 わねども二個並べ一顔と似合ぶるる妹脊六
 互ふおもしろと峯次第へ今も古郷の爰み見一両女の
 りを思ひすれば衣通脂も楊そ肥もう久しうるもの
 ゆうざれと絆なま身の情ふまげなく旅捨らまも
 せむしとよくく慕ふばこそ春も行く娘をめでそれ

いまだのち
らぶ時中支度として来月常々帝が彼地へ降る
常同付のまゝとせしむる事と夫婦のまゝと宮内省
似合ふと云ふ一ト思ひ切つてはかたじけなく
悦びのさぐりく頼み紅葉の夕映やきづくなど
惜しき異なる国の人もうなれ煮の路をたゞ
樂しくあれど若くは帝へはつくと
さんがすねるうと言ひするものこそや
おかしと私と情も何ものもないで
死んで



録金で諸君と十分さうせでしうて姿形を又まゝに
美黒くあて。モウ録金第一番といふ好男とて家の
丈夫の者としてよゝゝ伯父さんも安堵さるゝといふ
お茶も田舎の人を丈夫にするよう人宜らふと云ふサ
トシバお茶の眼も一げも茶次第の種をさうく候
ぐ。京へエ松やア各外のお人と夫婦ふゝといふ
さゝ行故の録金もぐ。お茶のうと種をさうく
見ふけ。

第四回

筆走一旅の宿のねもさうさで結ひ別る年抱ふト
旅へ寒業齊結連ぬの春遠さう。定ふ春旅の
さう遠さう。茶次第の伯父の病も今夜一睡ふ
身の上さうもさうの茶次第ふといふれ。いふさう
お茶も無金にけいさう。お茶をさう。田舎の
都ふお茶の眼を連る中かまゝ。お茶もさう。お茶の
お茶もけいさう。お茶もさう。お茶もさう。お茶もさう。

[illegible]

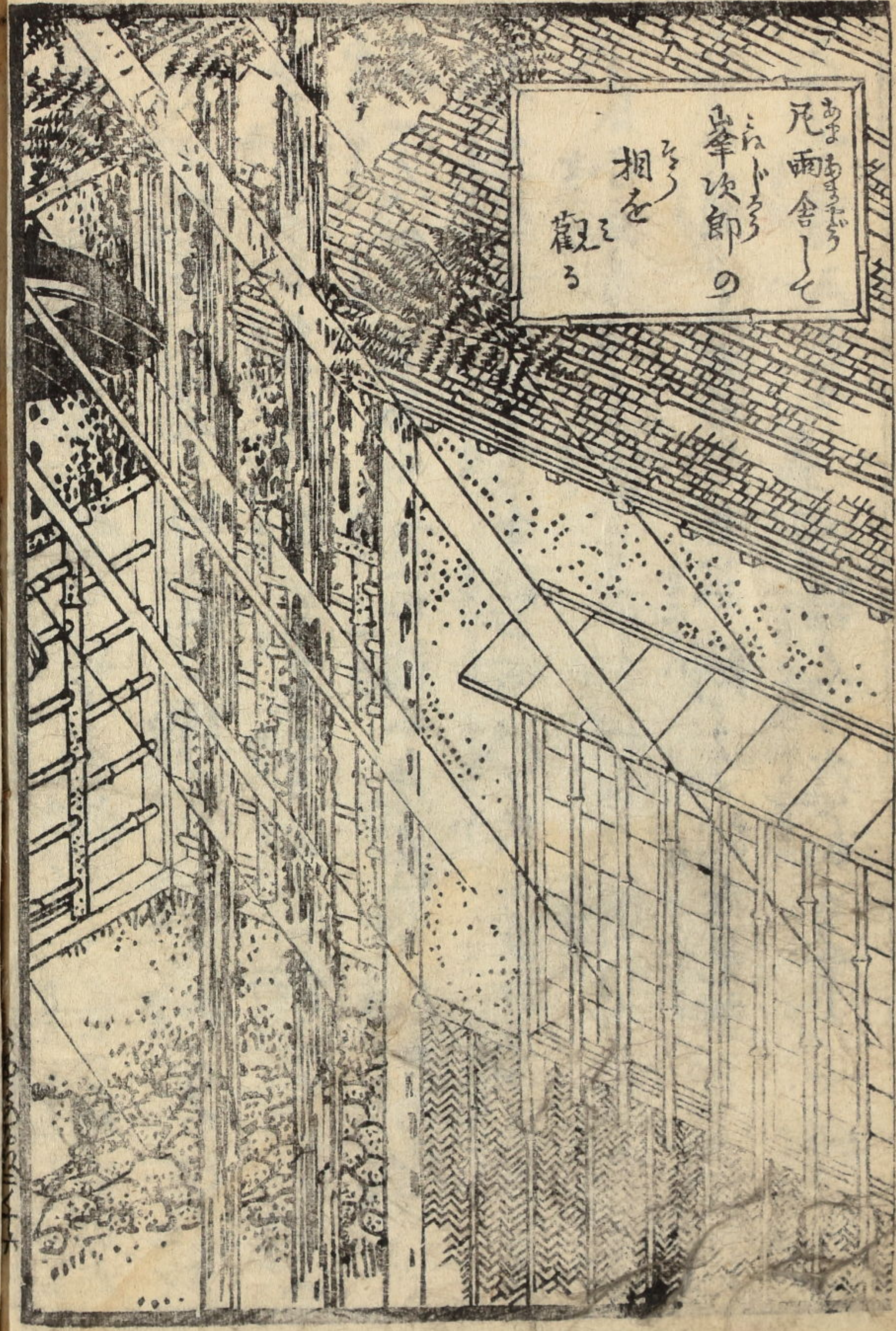
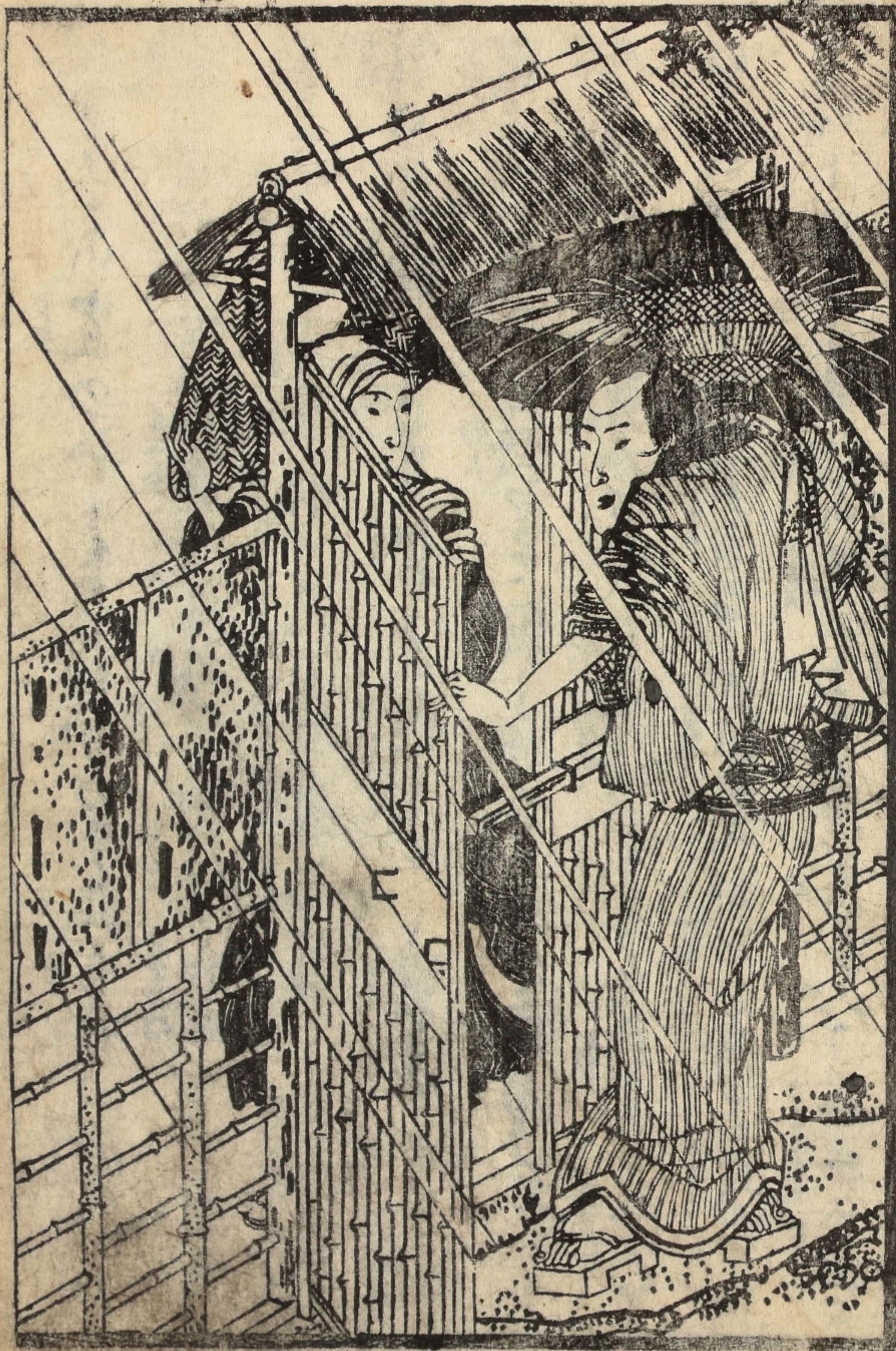
未銘倉へてあせざるるりりけまふ峯次郎もあ京も極を

夜見世の珍もさふ世の青もあうらふ事
 秋霞に秋のちりごとと暮る集の輪乃
 幸ひぬい

[illegible]

だろー
たろーにーそくまろとを伴まーこふおれまーく
ろてれども公のそくまろおれまーんのり用を満
上極と思ひこんで居るのふけもおれまーんハ用を
言つけてもおれまーんは成はるうてなろーうおれまーん
まろーおれまーんが中ーうまろまろヨおれまーんを
田舎者でもおれまーんが中ーうまろまろヨおれまーんを
まろまろでまろまろまろまろにまろまろまろまろ
あてまろまろと教訓て用紙書けておれまーんを成まろナト

まろまろ
在所は居るまろまろおれまーんは成まろまろ
男のまろまろまろまろまろまろまろまろまろ
おれまーんは成まろまろまろまろまろまろまろ
連てら旅のまろまろの親家でまろまろまろまろ
おれまーんは成まろまろまろまろまろまろまろ
父のまろまろまろまろの父のまろまろまろまろ
おれまーんは成まろまろまろまろまろまろまろ
おれまーんは成まろまろまろまろまろまろまろ
おれまーんは成まろまろまろまろまろまろまろ



あまの
雨舎
山
峯次郎
の
相を
観る

おきまゝの空のけしきでござるまゝの所へおのれを
あてつけさせけ方へ遠入つてお供を成すトお供
らして様へお供は尼の形容何となく見えて
情のうねりのきもいふ影くくく禁まがまゝ
羅の香へ今も残して残しげき中緒あつぬへ
くまうけきききききききききききききき
ひきききききききききききききききき
まのトききききききききききききききき

うけて町寮に金銀をあらう 尼トこころへは
近所の者でござるまゝの三圍の福はけききき
いふまゝのききききききききききききき
所をききききききききききききききき
まを不顧はきききききききききききき
目を食ふと福の遠ききききききききき
晴の雨の辰雪うきききききききききき
しころきききききききききききききき

時のあつてもとゆゑなくその相愛易ゆきと
 おもふは自身の上にも及ばぬを痛く苦をむる
 の思ふの余がねえとて僥倖して一夏を
 待つておもう

